飛び出せ学校

この新聞は、中津市樋田小学校の６年生（林世史基教諭＝11人）が、大分合同新聞社の記者と一緒に作りました。

大分合同小学生新聞

発行者
中津市
樋田小学校
6年生

信じられない山国川の水害

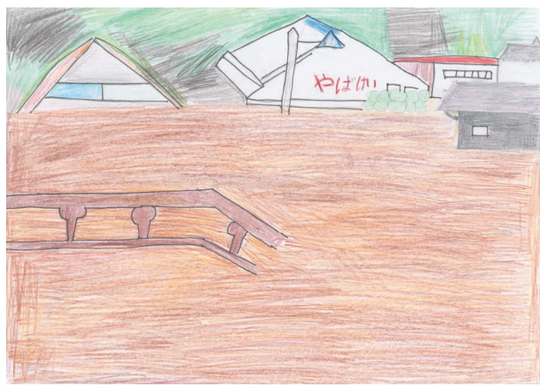
小林慎さん

昨年10月7日にNHKの「おおいた減災スクラム」の授業がありました。その中で、私たちの学校の近くには、山国川があり、氾らんしてしまったら、約5㍍校舎の半分の高さまでつかってしまうことを知りました。

記者の小林慎さん（24）が2012（平成24）年7月にあった九州北部豪雨について教えてくれました。当時の様子を映像で見せてくれました。とてもひどい様子が伝わってきました。その時は、私たちは、2、3歳くらいであまり記憶になかったので、信じられませんでした。

また、今永正直さんにも、当時の被害についてうかがいました。いろいろな話を聞いた中で、一番心に残ったのは、レストハウスが起きやすい場所などを調べました。他にも、早く避難できるようにバッグに懐中電灯や服など必要なものを入れ、水など非常食を準備しておくとよいことを家族に教えました。

2012年の青の洞門公共駐車場。水害で階段やお店がつかってしまいました



洞門の駐車場まで水が上がってきたことです。被害の様子は、写真でも見ることができました。

「おおいた減災スクラム」の授業の後、家に帰ってさっそく、ハザードマップを見て、避難場所や災害が起きやすい場所などを調べました。他にも、早く避難できるようにバッグに懐中電灯や服など必要なものを入れ、水など非常食を準備しておくとよいことを家族に教えました。

花が彩る青の洞門の秘密

私たちの住んでいる中津市本耶馬渓地区は、羅漢寺、オランダ橋、競秀峰など多くの観光地があります。その中の一つの「青の洞門」について、歴史やネモフィラの花が咲いている理由など知ってもらいたいと思い、記事にまとめました。この記事を読んで、もっと多くの方たちに「青の洞門」に来てもらったら、うれしいです。

ネモフィラ色に染めよう

春になるとみんなが頑張って植えたネモフィラがきれいに咲きます

今永正直さん

春になると青の洞門の川向かいに一面青色のネモフィラが広がります。そして、たくさんの観光客の人たちが見に来ます。私たち樋田小学校では、毎年3年生が冬に種をまきます。でも、なぜネモフィラをまくようになったのか気になりました。

そこで、元中津市本耶馬渓支所長の今永正直さん（61）にお話をうかがいました。

2012（平成24）年に九州北部に豪雨が降り、山国川が氾らんし、非常に大きな被害を2度も受けました。そこから復旧しようとして、青の洞門を青に染めるプロジェクトが始まりました。また、たくさんある青色の花の中で、なぜネモフィラなのかと言うと、6月から10月までは、米作りをしています。4月から5月までに咲く青い花というのが条件で、それにぴったり当てはまったのが理由でした。

植えている面積は、約1㌶で協力団体28団体507人もの人々が参加してくれていますが、初めは、5団体64人の参加だったので、多くの方が参加してくれるようになり、うれしかったそうです。ネモフィラを見に来て「きれい！」「かわいい!!」などの声が聞こえるとき、すごくうれしくてやりがいがあると話していました。

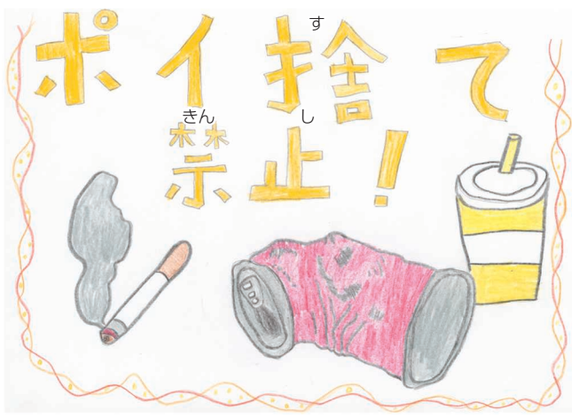
ふるさとをきれいに！

私たちは樋田地区のために何かできることはないか考えました。

それは、ふるさと樋田を大切にすることです。春には、ネモフィラの花を、また、秋には紅葉を見るために、多くの観光客が青の洞門を訪れます。他にも、オランダ橋などたくさんの有名な観光スポットが、私たちの町にはあります。

そこで、今永正直さんと一緒に、私たちは、青の洞門の入り口に、ネモフィラの種をまくことになりました。観光客の方をお迎えするだけでなく、私たちが樋田を離れても、戻ってきたときに、ふるさとのことを思い出してほしいという思いが込められています。

他にも、地域をきれいにする活動を行うことです。私たちは毎月1回「クリーン活動」を行っています。でも、私たちは、普段、町を歩いているときに、ごみを拾うことはあまりありません。クリーン活動以外のときでも、「私たちの町をきれいに」という気持ちでごみがあったときには、しっかり拾っていきたいです。そして、私たちの樋田の町をきれいにしたいと思います。



禅海和尚をしっちょるかい？

禅海和尚は最初は１人でツチとノミだけで洞門を掘り進めました。ツチとノミは、触ってみると重くてびっくり

五十川孝正さん

私たちは、中津市歴史博物館の五十川孝正さん（58）に青の洞門の歴史について教えてもらいました。実際に写真を見せてもらいながら、私たちの知らない青の洞門について、たくさん教えてくれました。

みなさんは、禅海和尚のことを知っていますか。禅海和尚は、青の洞門の岩壁に洞門（トンネル）を掘ったことで有名です。初めは1人でツチとノミを使い、掘り進んでいましたが、後に多くの賛同者や協力者を得て、約30年という長い年月をかけて、洞門を完成させたそうです。五十川さんに、ツチとノミを触らせてもらいました。意外に重くてびっくりしました。当時は洞門を掘るのが、とても苦労したんだと、改めて思いました。

どうして禅海和尚は、洞門を掘ろうと思ったのでしょうか。それは、当時の羅漢寺へ行く道に理由があります。当時の道は、鎖戸と言って、丸太を鎖で連ねた桟道でした。そのため、たびたび、足を踏み外し、人馬が落ちて溺死していました。それを見た禅海和尚が青地区に洞門を掘ったそうです。

ぜひみなさんも、青の洞門の歴史に触れてみませんか。

新聞ができるまで

中津市樋田小

ふるさと復興 心一つ

「もっとたくさんの人に青の洞門に来てもらいたい」―。中津市本耶馬渓町にある樋田小学校の６年生11人は、町内の景勝地・青の洞門の魅力を伝えようとペンを執った。

大分合同新聞社北部総局の内田杏実記者（26）は「情報を届けることで喜んでくれる人がいる。ぜひ皆さんにしか書けないすてきな記事を完成させてください」とアドバイス。子ども記者たちは洞門の歴史をよく知る先輩たちの声を聞くべく、教室を飛び出した。

市歴史博物館の五十川孝正さん（58）には洞門を掘った禅海和尚について質問。和尚が作業に使用したとされる道具に触れ、約30年かけて硬い壁を掘り続けた和尚の苦労を感じた。

ほとんどの児童が洞門から連想するものとして挙げたネモフィラについても調べた。元市本耶馬渓支所長、今永正直さん（61）らに取材し、町内に春の到来を知らせるネモフィラの苗植えは2012年の大分県豪雨（九州北部豪雨）で２度の浸水被害から復興を目指し、地元有志らが始めた「プロジェクト」であることを学んだ。児童たちは当時２、３歳であったため「水害のことは記憶にない」。今永さんらへの取材を通して防災への意識が高まったのと同時に「ふるさとを大切にしたい」という思いが増した。

取材後は大分合同新聞社ニュース編集部の大塚史穂記者（44）から見出しの付け方や興味を引くレイアウトのコツを学んだ。

㊧北部総局の内田杏実記者から記事の書き方などを教わる（2021年６月11日）
㊥青の洞門とネモフィラの関係について取材する児童（2021年11月４日）
㊨文字や表現に間違いがないかグループに分かれて校閲した（2022年３月10日）

大分合同新聞プレミアムオンライン Gate ゲート

動画

新聞づくりの様子をご覧いただけます

この企画は小学生（主に５、６年生）が、地域の魅力や課題を取材し、新聞にまとめる作業を通して古里を見詰め直すことを目的としています。問い合わせは大分合同新聞社地域連携室「飛び出せ学校」係へ。☎097・538・9729、Ｅメールnie@oita-press.co.jp